

## 『弁内侍日記』論 三

—その文学性—

森 田 兼 吉

『弁内侍日記』はしばしば「お湯殿の上の日記」との類似性が指摘されている。玉井幸助氏は、

弁内侍日記を読んで連想せられるのは、やがて現れる「御湯殿の上の日記」である。「御湯殿の上の日記」は宮中の御日常を記した女房の記録で、室町時代中期ごろから徳川時代末までのものが、今日に伝えられている。それは役目で記録した公の日記であるが、弁内侍日記はそれに近い性質を持つている。内侍という至尊に近く奉仕する女房が宮廷内で記した日記で、おそらくこのような日記は弁内侍以外の女房たちにも書かれたものである。弁内侍日記は、紫式部日記や讃岐典侍日記のように里居のつれづれに書かれたものではなく、宮廷内で書かれたものであらうと思われる。

と述べられ、それは後の論に大きな影響を与えているようである。

『弁内侍日記』が、その多くが日付を明記した記事の集積という形態から、平安時代の『かげろふの日記』や『和泉式部日記』より

も「お湯殿の上の日記」に近い印象を持たれるのは、一応自然であらう。お湯殿の上とは内裏のお湯殿に奉仕する女房たちの詰め所であるといい（国史大辭典②）、その日記は、天皇に近侍する典侍・掌侍等の女官たちが交替で記した職掌日記である。群書類従に慶長三年（一五九八）の分、続群書類従の補遺三（十一冊）に文明九年（一四七七）から貞享四年（一六八七）までの分が活字化されている。その最初の文明九年正月の分からまずいくつか文を見よう。続群書類従本には句点と読点の別がなく、濁点もないので、私見によつて読みやすいように整備したが、すぐ原形がうかがえるようにと、仮名遣いは正していない。（一）内は森田の注記である。

一日 御ゆかけ御さたありて、御ましになる。あさ、御いわぬ。御こわ、くごまで、いつものごとし。御はがため、もの、ぐのきぬ、ぶくなるゆへ、すゞしのはかまにて御いわぬの、ち、つねの御所にてまいる。御はいせんとしどしのごとく、大すもじ（大納言典侍）まいらせらる。こ（続群書類従本には「きカ」との校訂者注記あり）う上らふも御まいり。

三日 御いわぬけふもおなじ。はがためすきくとまいりてめでたし。

五日 ねうばうたちかれるの御てうし事御申さたあり。めでたし。

ここでは二日と四日の条は省略したが、『お湯殿の上の日記』は日次の日記である。その日付が明記されている日記であることと、傍線を引いた「めでたし」の用法などが、

寛元四年正月二十九日、富の小路殿にて御讓位なり。そのほどの事ども、かずかずしるしがたし。いといとめでたくて弁内侍、

今日よりはわが君の代と名づけつつ月日も空にあふがざらめや (一)

三月十一日、官庁にて御即位。春の日もことにうららかなりにしに、さまざまの儀式どもいはむかたなくめでたし。人々のすがたどもめづらかに見え侍りしかば弁内侍、

玉ゆらに錦をよろふ姿こそ千とせはけふといとめづらなれ (二)

と最初から「めでたし」を連発している『弁内侍日記』との近さを印象づけていよう。

だが、『お湯殿の上の日記』を読み続けていけば、両者の類似よりも大きな懸隔の方に目がいかざるをえない。

『お湯殿の上の日記』は、統群書類従所収分だけでも二百年以上にわたり、同じ年の同じ月の分であっても、当番制で記者は一人ではない。従っていつもまったく同じ文体で書かれているともいいが

たいのだが、どの場合も、簡単な事実の列挙にとどまり、記者の感情表現などはまず見ることができない。

えしやう院、はじめてまいられて、御さかづきをたぶ。ゆきふりて御庭おもしろし。 (閏正月七日)

のような例もあるにはあるが、それはきわめて稀で、「めでたし」が使われているのが目立つ程度であった。今任意に統群書類従補遺三の第五冊の最初の年(天文十五年(一五四六))のページを開いてみる。

てうのはじめあり。めでたし。 (正月五日)  
御さか月いしくとまいりてめでたし。 (二月十三日)

みしほするくとけちぐわんにて、御なで物かへしまいる。御くわんじゆもまいる。てんきよく、するくと御ぐわんじやうじゆと、めでたし。 (二月廿九日)

と、使われているのは「めでたし」だけである。くわん御の後、うけとりの御さか月大すけ、新なあし。としぐのごとく御ひしくとめでたし。 (弘治二年正月一日)

のような「めでたし」を連発したところもあるけれども、その「めでたし」の類の評語さえも、二カ月にわたって見られないこともある。この第五冊では、

前たいふらくはつのよし申さる。ことのはもなし。 (天文廿年三月九日)

という繰り返しが、親しい先人の出家落髪にことばも出ない記者の驚愕と悲嘆を表してそれなりに痛切である例も目に入ったが、『お

湯殿の上の日記」の記事はほとんどが事実の列挙で、記者の感情も個性の発露も押さえた形の文章である。

『弁内侍日記』の感情を示す形容詞については、大内摩耶子氏に詳しい調査がある。それによれば、この作品には、

おもしろし(七七) をかし(二七) めでたし(一一)  
いみじ(四) 尊し(二) ゆかし(四) うつくし(三)  
やさし(二) 名残おほし(五)

といった、明るい方向を示す快的感情を表す語が多く(括弧内の数字は使用回数)、不快感情を示すものとしては、

あはれなり・ものあはれなり(計一〇) くちをし(五)  
あさまし(二) かなし(五) おそろし(四) はか  
なし(二) いとほし(二)

がある。「おもしろし」「をかし」が特に多く使われ、表現が類型的で単調であることは否めないが、大内氏のあげられたものだけでも十六語一六四回、『お湯殿の上の日記』とは比較にならない感情表現の多さである。さらに異なっているのは、こうした語の文中での用法である。『お湯殿の上の日記』の場合、「めでたし」は必ずしも記者の主観を表すものではなく、そこに居合わせている全ての人がそう感じ、そう見ている表現である。ところが『弁内侍日記』の場合、前掲の第一段では、讓位の儀式を「めでたし」と見るごと自体、皇位を受ける者側の立場からの発想なのだが、「いといとめでたくて弁内侍」として弁内侍の歌が記されていて、「めでたし」と感じたのがだれよりも弁内侍であったことを語っている。二段では、即位の儀式を「めでたし」と感じたというのは一般論に近いが、すぐ

続けて「人々のすがたどもめづらかに見え侍りしかば弁内侍」とあって、その感情を弁内侍の心情に直結させている。『弁内侍日記』の感情を表す語の多くは、

けいきおもしろく侍りしかば弁内侍(歌略) (三)  
ひきたがへたるもおもしろくて弁内侍(歌略) (五)  
なごりおほくて、釣殿のかたにやすらひて弁内侍(歌略) (七)

のように歌に直結して弁内侍の心情表現となっているのだが、歌とかわらなくても、

有明の月くまなくてことにおもしろく侍りしに、御直廬にて御連歌ありしこそいとやさしく侍りしか。(七)  
勾欄にそへてたてたる馬形の障子のはずれよりほのかに見ゆる月影いとわりなきを。(九)

のように弁内侍個人のものとなりえている。

ともし火の影かすかなるもおもしろくて少将の内侍(少将内侍の歌と弁内侍の返歌略) (八)

とくとくとたびたびせめられしもたへがたくて少将内侍(少将内侍の歌と弁内侍の返歌略) (一一)

と少将内侍の心情を表現している例もあるが、前回の論で指摘した、『弁内侍日記』には少将内侍の視点に立った叙述がいくつもあるといふ、作品の方法と関わるものであろう。

『お湯殿の上の日記』は当番の女房が交替で記した職務の日記であり、感情も個性も押さえた、事実の列挙という文章になるのは当然で、一個人の記である『弁内侍日記』がそれと異なるのもむろん

必然のことであつた。また、歌を含まない『お湯殿の上の日記』に對して、『弁内侍日記』にはどの段にも弁内侍もしくは少将内侍の歌が記載されている。その姉妹の歌だけで他人の歌は載せないという方針が最初あつたと思われ、前回の小稿でも論じたように、『弁内侍日記』は記録を目的としたものでもなく、きわめて私的な作品なのであつた。題材を自分が内侍として務めている宮中に限定しながら、なお公的なものでも記録が目的のものでもないことは、『お湯殿の上の日記』と併せ読むことによつていさうよくわかる。

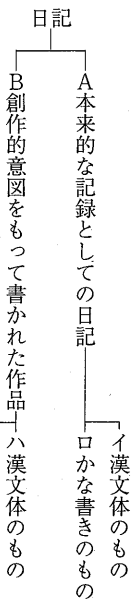
『お湯殿の上の日記』には「天皇の動靜を中心に朝儀や叙位任官臣下への下賜、幕府や公家からの進献等が書かれている」。天皇近侍の女房の記録として当然の内容だが、こうした観点から『弁内侍日記』を見ると、欠けている事項が多い。『弁内侍日記』の最初の年は讓位の正月二十九日からだから、年頭の記載から見られる第二年の寛元五年（宝治元年＝一二四七）を例にとつて、『史料綜覧』から正月の天皇に関わる事項を抜き出してみよう。

- 一日 小朝拜、節会。
- 五日 叙位。
- 七日 白馬節会。
- 一五日 政始。
- 一六日 踏歌節会。
- 一七日 射礼。
- 一九日 撰政実経ヲ罷メ、前関白兼経ヲ以テ、之二還補シ、実経ヲ一条院ニ幽閉ス。

これらの中で『弁内侍日記』に記事のあるのは●を付けたも

のだけである。記事のある段にしても、「はいらいのけいき、ことにめでたくて」（二三二）「白馬の節会なり。春の日かげもうららかなるに、内弁のよそほひゆゆしくみえしかば」「その夜、はくばのわたるを見て」（二三三）とあるだけで、事の詳細は全く記されていない。諸方からの進物などについても何も記載はない。それは天皇の四歳という幼さによるだけではないだろう。どの段にも歌があるということは、別の言い方をすれば、歌を伴わないようなことは何も書いていないということなのである。

日記文学の研究史のかなり長い間、記録としての日記と日記文学とは混同されてきた。ところが、『土佐日記』によつて先鞭がつけられ、『かげろふの日記』によつて確立された日記文学が、記録としての日記とは性格を異にする文学作品であることは、今日ではほぼ常識になつてきたといつてもよいだろう。わたくしはその間の事情を論究した上で、日記をつぎのように分類したことがある。



この分類によれば、『かげろふの日記』や『和泉式部日記』などと共に『弁内侍日記』はBのニであり、『お湯殿の上の日記』は、『河海抄』などにその一部が引かれて存在の知られる『太后御記』

と共にAの口に属するものであった。両者は全く別系統の作品なのである。『弁内侍日記』から『お湯殿の上の日記』を連想することはよいだろう。だが、「弁内侍日記はそれに近い性質を持つている」とか「一女房の目からみた公的日記に近いもので、御湯殿の上の日記の先行をなすものかと思われ<sup>(5)</sup>」となると、それは間違いないわざるを得ないのである。

## 二

宝治三年(一二四九)が建長と改元されたときのことが『弁内侍日記』には、

三年二十八日、改元なり、公卿八人、上卿花山院の大納言<sup>(6)</sup>だまき、経光の宰相などぞきこえし。奏まつほど、ふくるまで台盤所に内侍たち何となき物語して、いにしへの延暦・延喜は二十年にもあまりけるに、かくほどなくかはるなごりをしきやうにこそなどいひて弁内侍、  
ほどもなくかはるもつらしいにしへはたとせあまるとし  
もある世に (八八)

のように記されている。この年の二月一日には『日記』八一段にも詳しく書かれているように閑院御所が炎上し、世の中とかくさわがしとて、年号かはる。三月十八日建長になりぬれど、……(増鏡 増補本系煙の末々 講談社学術文庫本) ということからの改元なのだが、それは『増鏡』にもあるように三月十八日のことであった。『新註』が『百鍊抄』を引いて指摘しており、同時代の即時の記録としては『岡屋関白記』に詳しい。それ

が『弁内侍日記』に二十八日に誤まらされているのはなぜだろうか。伝写の過程での誤写ということがまず思い浮かぶが、『日記』の構成を見ると誤写とはいえなくなる。すなわち、

二十日は臨時の祭の御馬御覧なり。…… (八六)

花ざかりことにおもしろかりしに、ためうじの中将奉公にて御まりあり。 (八七)

の記事の次に改元の段が置かれている。石清水臨時の祭の御馬御覧は、『岡屋関白記』の三月二十日の条に「今日臨時祭御馬御覧也」とあつて、三月二十日であることは動かせない。となると、改元を記した八八段は『弁内侍日記』成立の最初から三月二十日以後のものとしてここに位置付けられていたことになるのである。改元が二十八日と誤認された上でその記事がここに置かれたのであつた。こうした誤認がなされた事情としては、

一 作者弁内侍の誤認。

二 『弁内侍日記』を現在のような形にまとめたのが弁内侍以外の第三者で、その編者とでもいう人の誤認。

のうちのどれかであろう。

年月日が記されていても、『弁内侍日記』がその時その時に書き継がれていったものでないことは、この改元の記事の位置からもわかる。といつても、平安時代のいくつもの作品のように回想によつて書かれたものでもない。弁内侍の作であつても、ある時点で集中的になされたか、何段階に分かれてかはともかく、自分の書いた文章と歌を基にして書きまとめたものであることは確かである。そこで、この段の記事を最初に書いた段階での誤認(一A)と、ま

とめの段階での、基にした資料に日付が明記されていずそれを補つたための誤認（一B）という、二つの可能性をもつことになる。ただし、『弁内侍日記』を第三者の編纂とするには、その成立を弁内侍の死後とせねばなるまいが、彼女には少将内侍に続けて父信実をも喪う悲しみの歌が残されており（新後撰一五五二）、父信実の死は前回も触れたように文永二年（一二六五）だから、後深草天皇退位からでも六年以上は生きてゐる。『弁内侍日記』の各段はごく一部を除いて整然とした配列であり、それほど後の他人の編纂によるとは考えにくい。二説の成立する余地はほとんどないだろう。

『弁内侍日記』を読んでいくと、それが事件当日に書かれたものではなく、かなり後に書かれたものであらうと思われる段がいくつも目につく。

卯月のころ、太政大臣殿北山におはしますほど、女房たちほどとぎすの初音たづねおはしましたりけるに、かひがひしくききて太政大臣殿、

ほととぎすたづねにきつる山里のまつにかひある初音をぞきく

少将内侍、

ほととぎすさこそは山のかひありて大宮人の初音さくらめ弁内侍、

くもるよりのたづねざりせばほととぎす初音も山のかひやなからん

宝治元年四月当時の太政大臣は源通光だが、ここでは北山に邸宅があるといひ、『続後撰集』夏一七七・一七八に第一首と第三首が

前太政大臣と弁内侍の歌として採られていることからも、前年十二月九日に上表して太政大臣を辞した藤原実氏を差している。実氏はこの作品では最後まで太政大臣殿で通されていて（「新註」人名索引参照）、退任後も弁内侍は実氏を太政大臣として遇していたと見るべきで、後年の執筆故の記憶違いというわけではない。だが、「卯月十日のころ」といふ書き方はこの段が北山行きよりかなり後の筆になることを語っている。

月のあかりし夜、清涼殿の孫廂に人々あまたあそぶ中へ、中宮大夫隆胤扇のつまををりたるに書きつけて、（少将内侍と弁内侍の歌略）

「八月十五夜」（五八）「十六日」（五九）に続く段で、かなり後の筆であることは言を待たない。十五夜の段も「院の御会侍りしに……さらぬ殿上人も侍りしかども、これこそとをりにみえし花山院の大納言は……歌講せられしほどにぞ参られたりし。……御連歌などもありし」と珍しく過去の助動詞「き」を多用していて、後日の記であらう。中にはさまれた五九も含めて、これら三段は同じ頃に書かれた可能性が大きいだろう。後も、

権大納言夜番に参りて、萩の戸にて遊び侍りしに、（六一）  
中宮の御方へ御使に参るとて萩の戸のすいがいより見れば、（六二）

勾当の内侍の、つまの局にて夜もすがら琵琶ひきあかし給ひしを、（六三）

九月十四日、殿の上表なり。（六四）  
同じ月の頃、万里の小路の大納言、按察のすけどの、中納言の

すけどのなどさそひて、河よりあなたまで夜もすがら遊びて、

(六五)

秋の夜ながくていとつれづれなるに、

(六六)

中宮大夫、たかつんじといふ女孺にかくいはばやと思ふ、いか  
がとて、

(六七)

常の御所の御壺に秋の草ども植ゑられたる中に、

(六八)

月あかき夜、同じおつぼの菊いとおもしろきを、

(六九)

のように六四段を除いてその日の記とは思えないものが続く。その  
後の、

五節は十六日よりはじまる。

(七〇)

も、それに続く七一一段の、

節会は十八日なれば、月いとあかりしに、召しにすすみて侍

(七一)

りし。

という書き方から考えれば、五節の記事全体が後日の執筆によるも  
のと言つてよさそうである。それ以後も、「臨時の祭の御馬御覧の日」  
(七二)「叙位に滝口のすぐるを聞けば」(七三)と月日の記されて

いない記事が続き、「二十四日記録所の行幸なり」で始まる段(七四)  
で宝治元年は終わる。翌年は母の喪に服して里にいて、

宝治二年母の忌にて里に侍りしに、石清水の臨時の祭、二十日、

思ひやりて弁内侍

(歌略)

同じ頃夏のひとへをたまはせれば弁内侍(歌略)(七五)

という三月の記述の後、「十二月十九日仏名の夜まありたりしに月  
いとさえておもしろし」という再出仕の段(七六)があるだけであ

る。つまり、宝治元年の半年から二年の末までのかなり長い間、そ  
の日その時に書かれた段はまずないことになる。

その他にも、宝治二年二月一日の開院御所炎上の八一段は、避難  
の際車から輿に乗り移った皇后宮について、中納言の典侍が車の下  
簾をうまく使つて目立たぬよう「とかくまぎらはし」たのだが、

夜目にも御ことがらただの人には見えさせ給はざりしとぞのち  
に語り給ひし。

とあつて後日の記述とわかり、これもすでに引いた、建長二年(一  
二五〇)十月十三日の朝覲の行幸の段(一二二)は、

還御ののち、めでたかりしその日の事ども申しいでてぞ、めし  
たるまね(二字、きぬカ)、たれがしは何色々と、少々萩の  
戸にてしるし侍りしに……

と、還御してすぐ御所の一室で弁内侍が記した記録のあつたことを  
語っているけれども、現在のこの段にはそうした服飾の記述などま  
つたなく、それとは別の、もつと後に書かれたものであつた。と  
いうふうに一々例示していく必要は必ずしもないであろう。これま  
でに掲げたものの他の、やはり後日の回想によつて書かれたものと  
推定できる記述の段数だけを以下に記しておく。七、一三、四〇、  
八三、八七、九三、九七、一〇一、一〇二、一〇九、一一九、一二  
〇、一二一、一二二、一二五、一二六、一三三、一三七、一四七、  
一六一、一七〇。

回想によつて書かれたといつても、その出来事の直後に記された  
メモや日記の類を基にしたものもむろん多くあるであろう。また、  
日付の明記されたものの中にはその時その時に書かれた(ままの)

ものもあるであろう。だが、全体的に見て、『弁内侍日記』は日次の記でもないし、次々と書き継がれていったものでもなかった。一気にか、何回かにわたってかはまだわからないが、回想もまじえてまとめられたものであった。当然そこには、作品化するにあたっての、執筆意図なり編纂意図なりがあったことになる。

### 三

『弁内侍日記』の中心をなすものは歌であった。『弁内侍日記新註』の分け方では一三九段だけが歌を含まないが、前述のように、本来一三八、一三九、一四〇の三段は一続きで、これを一まとめにして考えれば、どの段にも歌が入っていることになる。それも弁内侍の歌である。四段と一八段は少将内侍の歌だけだが、これも前回に論じたように、少将内侍の視点によってなされた描写と共に、『弁内侍日記』が弁自身と仲のよい妹少将内侍との集という性格を有しているためであった。ただ一つ問題が残るのは五三段で、

七月十五日、月いとおもしろきに、清涼殿いかならん<sup>と仰せ</sup>  
ごとありて、只今は御前にまゐるほどなれば御格子もすべらず、  
御帳のもとにて御覽せさせおはします。ことにくまなく見ゆれば、  
ば、ばいぜむ為氏なり。

今宵まだはじめの秋のなかばとてかつがつ月の影ぞみちぬる

この文では「今宵まだ」の作者は為氏と読むのが自然であろう。『新編国歌大観』も為氏としている。ただそうなると、弁内侍の歌も少将内侍の歌も含まない段がここにだけ出来てしまう。傍線部分

は、群書類従本（「新註」の底本）や内閣文庫本ではこのとおり本文と同だが、彰考館本は「はいせん<sup>為氏也</sup>」と小字の注記になっている。「新註」は「ばいぜむ為氏なり」全体について「これは注として附記せられたのである」という注をつけている。「御前にまゐる」（天皇にお食事を差し上げる）の部分に付けた注記が本文に紛れ込んだという可能性はあり、そうであれば、この歌の詠み手は弁内侍に見えてくる。ただそれでも、自分の歌でもその前に弁内侍と作者名を書くのがこの作品の例だから、ここは例外になり、疑問は残る。「ばいぜん<sup>為氏也</sup>に」の「に」の脱落と考えても、弁内侍という作者名のないのは同じだし、「清涼殿いかならん」と仰せになり、御帳のもとで月を見ている人（撰政か）をさしおいて為氏に向かつて歌を詠むことはありえない。と、あれこれ思案にくれるのだが、「清涼殿いかならん」という問いかけは陪膳中の為氏にはなく弁内侍へのものと解されるから、それに答える形のこの歌が弁内侍のものである可能性は大きいではあるまいか。

『弁内侍日記』はあくまでも歌を中心にした作品であった。たとえどんな大きな出来事があったとしても、弁内侍が少将内侍の歌を伴っていないければここに収められることはなかったのである。われわれは今日『弁内侍日記』を日記文学として読もうとするあまり、つい散文の部分に目が行ってしまうのだが、まず歌を鑑賞してもらうことを作者は欲しているであろう。歌人として弁内侍と少将内侍がいかに重んじられていたかは前回で述べたとおりである。『弁内侍日記』がまとめられ、読者の目にふれるようになったのは、少なくとも『日記』現存本の最終年である建長四年（一二五二）より



後のことだが、『日記』第三年の宝治二年（一二四八）に後嵯峨院より院宣が下り、建長三年（一二五一）に奏覧された『統後撰和歌集』には弁内侍四首、少将内侍五首が採られてもいる。つまり『弁内侍日記』は勅撰歌人の集でもあった。この作品の初期の読者たちはまずそうした観点から読んでいたはずである。そうした観点に立つて読むとき、『弁内侍日記』はけつして期待を裏切ることにはなかつたであろう。作中の弁内侍の歌で勅撰集に採られているのは次の六首である。勅撰集の形で掲げ、『日記』の段数を付記した。

1 卯月のついたちごろ、内より女房ともなひて郭公ききにとて西園寺にまかれりけるに、はつこゑききてよみ侍りける  
前太政大臣（歌略）、

これをききてよみ侍りける  
弁内侍  
雲井よりたづねざりせば郭公はつねも山のかひやなからん  
（統後撰 夏 一七八。四六段）

2 なが月の例幣に神祇官にまゐりて侍りけるに、にしきをおりいでぬよし申しけるをりしも時雨のしければ 院弁内侍  
夕時雨木のはをそむる時しもあれなどおりあへぬ錦なるらん  
（統拾遺 雑秋 六二五。一四四段）

3 後深草院位御時、花のさかりに上達部殿上人まりつかうまつりけるを御覽せられけるよしきこしめして、松枝にまりつけてたてまつらせ給ふとてむすびつけさせ給うける  
後嵯峨院御製（歌略）

御返し  
後深草院弁内侍

かぎりなき千世のあまりのありかはずはけふかぞふともつきじ

とぞ思ふ  
（玉葉 賀 一〇六二。一一一段）

4 後深草院御時、五節はてて官庁より閑院へ還御なりて後よみ侍りける  
弁内侍

雲もにてありしくもゐの恋しきはふるきをしのぶ心なり  
（玉葉 雑五 二六〇九。二六段）

5 後深草院の御位のはじめくろきの屋へむかひて侍りけるに、かみあげのくしをおとして官庁の局へこひにつかはしたりけるに、これもさしあふよし申し侍りける程に事もよくなりぬとたびたびせめられければ、弁内侍がもとへよみてつかはしける 少将内侍 しばしまてうちたれがみのさしぐしをさし忘れたる時のまばかり（二〇二〇）と申し侍りければくしをつかはすとて、  
弁内侍

さしぐしのさしあふ程の時のまはうちたれがみもわれぞみだるる  
（新千載 雑下 二〇二一。二一段）

6 花山院前内大臣宰相中将に侍りける比母の服にてこもりあ侍りけるに、南殿の橘のさかりになりけるををりてつかはすとて  
後深草院弁内侍

あらざらむ袖の色にもわするなよ花橘のなれし句を

（新千載 哀傷 二二八六。四九段）

返し、にびいろのうすやうにかきてしきみの枝につけてつかはしける 花山院前内大臣 いにしへになれし句を思ひいでて我が袖ふれん花ややつれん（二二八七）

『弁内侍日記』二六段でははつきり弁内侍の作となっている歌が、  
7 寛元四年、五節官庁にて侍りけるに、午日節会はつる程、

有明の月の光くまなく見え侍りければ、

後深草院少将内侍

ん  
このへによをかさねつる雪のうへの有明の月をいつか忘れ  
(玉葉 冬 一〇一三)

と少将内侍の歌としているものもある。

この他一四段の公相との少将内侍の贈答も『新後拾遺集』慶賀一五四五に採られている。『建礼門院右京大夫集』を別格とすると、『うたたね』『十六夜日記』、飛鳥井雅有の『春の深山路』『嵯峨の通ひ』その他のかな日記、『とはすがたり』『中務内侍日記』『竹むきが記』と中世の日記文学を数え挙げてこれほどの勅撰入集歌を内包している作品は他にはない。『十六夜日記』でも入集歌は四首なのである。勅撰集に見える弁内侍の歌四五首(少将内侍の作としている7を入れれば四六首)には歌合や百首歌などで詠まれた題詠と宮仕え生活の中で則興的に詠まれた歌との二つの種類のものがある。入集歌の大半は前者で占められているのだが、それにも発想のおもしろいものがかかりあって、弁内侍の歌の魅力の一つに即興で機知に富む歌作りをしていることが挙げられる。その魅力が最も良く發揮できる場が宮仕え生活であった。勅撰集に採られていなくても、『弁内侍日記』にはそうした魅力のある歌が多い。

夜更けの台盤所。遅く参内した殿(太政大臣通光)が「夜はふけぬるか、丑のくひのほどか」と問うが、だれも答えない。少納言内侍から「心のうちに御返事さだめてありつらむ、いかが」と言われ、

うたたねにねやすぎなましよなかのうしのくひとまさしてし

らずは

(三〇)

丑の刻の枕を刺す音などちつともわからなかったのは、うたた寝をして寝(子)過ぎてしまったのでしようね——はつきりはわからなければ、子の刻は過ぎ、丑の枕を刺す頃なのでしようという歌である。これはその場の人々がすぐに答えなかつた理由をも述べていて、いかにも気が利いている。もう一つ時刻に関する歌。萩の戸で何らかの遊びがあり、摂政にであろうか「ただ今はなにの時ぞ」と問われ、夜番の権大納言は「おきてゐの時」と答えた。洒落た答えだが、夜の御殿では内侍が寝ようとしている頃だったので、

ただ今はおきてゐぞとはいふめれど衣かたしたれもねななんと異論をとなえた(六一段)。もう亥を過ぎて子の頃だということと同時に、そろそろお休みの時間ですよともいつていることになるだろう。

例の閑院御所の炎上を記した八一段。あまりのことに人々は茫然としていたが、「さりながら延喜・天曆のかしこき御代にもあまたたび侍りける」と言い出す人達もあつたので弁内侍の詠んだ歌。

やけぬともまたこそたてめ宮ばしらしや煙のあとまなげかじ巧拙など論じる必要はない。とにもかくにも元氣の出る歌であった。この歌に人々は笑い、そうだそうだと、前向きな姿勢を取り戻すだろう。こちらも登場人物の一人にでもなつたつもりで弁内侍達の歌を追って読んでいくと、『弁内侍日記』はけっこう楽しめる作品なのである。

#### 四

にもかかわらず『弁内侍日記』は歌集にとどまっていはいなかった。

散文の部分は歌集の詞書の領分を超えていると言つてよいだろう。例えば何度も例に引く御所炎上の段は、彰考館本で数えて七〇行、三丁半を費やしている作中でも有数の長い段である。二首の歌を除く長い叙述は、火災に遭遇した人々の動きを克明に追つていて緊迫感を伝えている。『弁内侍日記新註』の段分けでは歌を含んでいない一三九段が一三八段・一四〇段とともに炎上後二年数カ月して再建なつた閑院へ還御した記事で、独立したものでないことはすでに述べたのだが、一三九段に見える閑院のしつらい・調度の詳細など一四〇段の歌の詠まれた状況の説明とはもう無関係である。二〇段の「二十二日の暁、官庁へ行幸あり」で始まる記述、五〇段の「五壇の御修法は」、いろいろな論考でよく引かれる正月十五日の粥の杖を扱つた七八段と二三〇段、いきいきとした詳細な記述はいくつでもあげられるが、長文のものばかりを示す必要はない。短い文でも、二六段の、

節会はてねれば、わらはのはり、露台の乱舞、御前のめしな  
どはて、清暑堂の月の有明の影、あかず身にしみておもしろき  
を人々ながめて弁内侍（歌A略）

かくて閑院殿へおはしまして、大内裏の事もひいでて弁内  
侍（歌B略）

ここに省略した歌Aの個所には前に勅撰入集歌を列挙したものの7の歌が、歌Bには同じく4の歌が入る。この段の記述と、7と4と

の『玉葉集』の詞書とを比較してみれば、『弁内侍日記』の散文部分分が、短くても、歌の成立事情の説明に終わっていないことがわかるだろう。歌集であれば勅撰集の詞書程度のものですむのである。そして全体の三文の二の記事に明記されている日付け。年が改まれば年号も記され、全体が時間的秩序に従つて配列されていることなどからして、作者が日記文学を意識してこの作品を書き、まとめたことは確かである。

松本寧至氏は、中世の日記文学が平安朝の日記文学には稀に見られぬ年号の記述が多く記されていることを指摘しておられる。日付を明記し、年号も書き、日次の日記に近い形態を取るのが中世の日記文学の一つの特色であつた。飛鳥井雅有は、『嵯峨の通ひ』で平安朝の日記文学との出会いを次のように書いている。

そこより、土左の日記、紫の日記、さらしなの日記、かげろふの日記などを、こせたり。まことにをんなの事なれば、虫損なり。おとこもかなにかくらん事、この国のことわざなれば、ゆへあり。伊勢物がたりも、あきつしまのものにてぞあるべしなどいふ。うるはしき事は、げに真名にてもありなん。されば、そのかたは、さ様にかきぬ。歌がたなどは、かやうにこそあらめとおほゆれば、今よりかきつく。すぎにしかたの事をもおもひだして、かきくはふべし。

「そこ」とは当時雅有が静養していた小倉山の麓の母の里近くに住む為家のところである。虫損箇所は現存する唯一の写本である天理図書館蔵本より以前に生じたもので、このままでは通じないが、通説のように「んなり」はもと「かななり」とでもあつたのであ

ろう。雅有は為家から送られたこれらの作品を見て感じるところがあり、みずからも仮名で日記を記し始めたのだが、彼がまとめたのは、紀行を除けば『嵯峨の通ひ』も『春のみやま路』も『日次の日記』であった。<sup>(7)</sup>「かげろふの日記」や『更級日記』に触発されながらも日記といえは日次の日記を想起するのが、雅有だけではなく、この時代の多くの人々の常だったのである。新しい試みの回想記に日記ということばを選び取り、日次の日記を離れた日記文学を創始したのは道綱母であったが、そんな彼女自身日次の日記にこだわった時期があった。<sup>(8)</sup>

弁内侍が生活していた後嵯峨院の院政下の宮廷は、和歌や連歌の会も盛んで勅撰集も編まれたりした、華やかなものであった。弁内侍たちはしばしば現在の素晴らしさを平安中期の王朝文化の全盛時と比較している。

三日がほどは、さまざまの御遊どもありなど聞こえしこそ、いにしへの九条右大臣の置六うち給ひたりけむこと思ひいでられて、今さらゆゆし。<sup>(一一三)</sup>

内裏炎上の際しても延喜・天曆の聖代の例を思い、  
「かやうの月の夜は、村上、一条院の御時は若き上達部・殿上人など、今様うたひ読経あらそひなど侍りけるに、参りて遊ぶ人のなき、いとこそくちをしけれ。こよひの番の人は誰か候ひつる」と問はせ給へば、万里の小路の大納言ただ今まで候ひつるものを、今しばしなど申しいでくちをし。<sup>(一六四)</sup>

傍線部は『紫式部日記』の「……若人などの、読経あらそひ、今様うたども、ところにつけては、をかしまもあり」(日本古典文

学全集P一六五)かそれによつた『栄花物語』初花を意識した表現である。今人のなきを嘆いた撰政兼経も、すぐ大納言公基を思い起こした弁内侍も、現在を村上・一条朝と比肩しうるものとおもっているのであろう。兼経は「いにしへの陣の定め」に、四納言たちかにゆゆしかりけむ。……(三七)と語つたりして一条朝への思いは深い。

……馬形の障子のはずれよりほのかに見ゆる月影いとわりなきを、いにしへ二条の後、後涼殿に候ひ給ひけむはこの一の対のほどぞかし、その世にもかくや心づくしなりけんかしなど申しいでて弁内侍(歌略)<sup>(一九)</sup>

ど、誤認はあるようだが、『伊勢物語』の故事を現在に引き寄せ、一二二段では後嵯峨院の御所である鳥羽殿への朝覲の行幸には御所の景気に感動して、

よよをへて語り伝へんことはやけふ□□(欠字、見るカの御カ)庭のみぢなるらん

とまで詠む。このすばらしい宮廷のはなやかな日々と、そこで縦横にふるまい、本領を發揮している自分達姉妹の生活と歌とを書き残したいと思うのは当然のことであつたらう。そんな思いは以前からあつて資料は揃つていた。それを基にしてまとめたのが『弁内侍日記』だということになる。それは形式的には日次の日記に近い。その文学性は平安朝の回想記としての日記文学とは別の角度から考えてみなければなるまい。<sup>(未完)</sup>

注1 『日記文学の研究』(昭和四〇・一〇 塙書房) 十八 弁

内侍日記

- 2 弁内侍日記考 大阪府立大学紀要 昭和三九・三
- 3 竹内理三・滝沢武雄編『史籍解題辞典 上巻(古代・中世編)』  
(昭和六一・八 東京堂出版)
- 4 A 『和泉式部日記論攷』(昭和五二・一二 笠間書房) 第  
七章の一 日記の語義とその展開 B 日記文学史の可能性  
日本文学 昭和五八・五
- 5 注2に同じ。
- 6 『中世女流日記文学の研究』(昭和五八・一二 明治書院)  
序論第三章 中古・中世の日記文学性の変遷 ―日記文学と年号  
から― 原形は 日記文学と年号―中古・中世の日記文学の問題として―群馬女子短期  
大学紀要 昭和五五・六
- 7 森田 飛鳥井雅有と日記文学 日本文学研究 一九 昭和五  
八・一一 参照。
- 8 注4所掲拙稿参照。
- 9 ただし、弁内侍の尚古の姿勢が、今の宮廷に対して不安や危  
機をおぼえたときに特に強いという魅力的な分析が今関敏子  
氏にある。この検討は後にゆだねたい。『弁内侍日記』再考  
―危機感と表現― 国際研究論叢 二の二 一九九〇年